

書道研究誌

# 書道の光



2  
2024

Vol.666  
宮城野書道会



漢詩を味わう

第175回





おうしやうくん  
王昭君

白居易

満面胡沙満鬢風 面に満つる胡沙鬢に満つる風

眉銷殘黛臉銷紅 眉は殘黛銷え臉は紅銷ゆ

愁苦辛勤顔頰盡 愁苦辛勤して顔頰し尽くれば

如今卻似畫圖中 如今ぞ卻つて画図の中に似たり

故国を離れてはるばる来たえびすの地、顔は砂漠の塵にまみれ、ほつれた鬢は風に流れる。

美しかりし眉のまゆずみも消え、ほおにさした紅もいつしか色あせた。

つらい悲しみはつるばかり、玉のごとき顔もげっそりとやせ細ってしまった。

今の私の姿は、皮肉にもあの醜婦の肖像画そのものになってしまっている。

《銷》消える。

《殘黛》褪せて消えかかったまゆずみ。

《臉》顔。

《卻》逆に。

《畫圖》画家が描いた醜くかかれた肖像画

王昭君の悲劇は四世紀の小説『西京雜記』に描かれて以来、古くから詩や物語、そして演劇の題材として数多くの作品が作られました。以前に李白の詩を紹介しましたが、今回はやや難読ですが白居易の「王昭君」です。王昭君は漢の元帝の宮女で王嬙のことで、文帝司馬昭の諱を避けて明妃とも呼ばれました。元帝は画工に描かせた肖像画によって宮女を召したため、宮女は争って画工に賄賂をおくり、美しく描いてもらおうとしました。金をおくらなかった王昭君は、画工に憎まれ醜くかれます。のちに匈奴の呼韓邪単于が漢王朝との和平の証として、宮女を求めた時に選ばれ、匈奴に嫁ぐこととなります。いわゆる政略結婚です。いよいよ別れの挨拶に御前に出た昭君の輝くばかりの美しさを見て、帝は大いに悔やんだが致し方なく、その事情を知って画工たちを処刑しました。王昭君は匈奴に嫁ぎ、呼韓邪の死後はまたその子の妻になって胡地で没しました。

中国の北西に広がる大砂漠に住み、たびたび中国に襲い来る匈奴は、人々にとつて恐ろしい民族でした。匈奴と戦うため駆り出された人の労苦は辺塞詩として多くの詩人に詠まれていきます。その戦いを避ける手段として和親のためとはいえ、人身御供として旅行く王昭君。元帝の前で輝くばかりの美貌で驚かしたその顔に、非常な砂埃や北風が吹きつけます。化粧もはぎ落され、みるかげもなく、醜く描かれた「画中の中に似たり」と憔悴しきったさまで詩を結んでいます。

王昭君の物語は日本でも古くから取り上げられて、「和漢朗詠集」や「源氏物語」の巻にも登場しています。

参考文献・唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・漢詩選「白居易」（集英社）

嶺外 音書絶え 冬を経て 復立春 郷に近づけば情更に怯なり 敢えて来人に問わず

嶺外音書絶冬を経て復立春  
郷に近づけば情更に怯なり  
敢えて来人に問わず

郷情更怯不敢問来人

李頻詩 漢江を渡る

《大意》嶺南に流されて便りも絶え 冬を経てまた春を迎えた 今ふるさとに近づくほどに胸がさわぎ 行き逢うひとに声をかけて 尋ねてみる勇気がでない。(李頻詩・漢江を渡る)

徳を耀かす

耀徳

文徳を耀かす

耀徳

文徳を耀かす

《大意》文徳を耀かす。(「國語」周語上)

世  
事  
問  
樵  
客

読み  
世事  
樵客しやうかくに問う(俗世のことは、きこりに尋ねてはじめて知る)

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について  
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。  
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。  
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世事問樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

澗芳襲人衣

澗芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歷

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は一点までです。

世  
事  
問  
樵  
客

世  
事  
問  
樵  
客

次号課題

隷書

林  
下  
暝  
宿  
長

世  
事  
問  
樵  
客

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

細字部昇格試験課題実施要項

- ・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
- ・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
- ・〆切三月四日(月)・受験料三、三〇〇円(税込)

音

テンヒツリンシ  
キンコウジンチョウ

略解

恬は筆を初めて作った蒙恒、倫は紙を初めて作った蔡倫、鈞は鈞馬という巧みに機械を作った人、任は任公という魚釣り名人



※今月の月例出品は中止となります。

佐藤象雲書

支部	順位	氏名
東風吹かばにほひをこせよ梅の花 あるじなしとて春を忘るな		

菅原道真

和泉溪石先生書



太子中舍人

たいしちゆうしゃじん  
太子中舍人

太子中舍人

■ 虞世南・孔子廟堂碑

(初唐・西暦六二九年頃)の臨書

(1)

象雲臨

『太子中舍人』

今月より新たに初等の三大家のひとり虞世南「孔子廟堂碑」を勉強していきます。過去に幾度か本欄で臨書してきた古典ですが、初唐にあつて前回までの褚遂良とはその用筆法と結体法において対極的な古典です。その一端を学習することは大変有意義だと思います。

褚遂良(西暦五九六―六五八)は杭州錢塘の人で、字を伯施といい、南朝末の陳時代に生まれ、隋に仕えて、のちに唐の太宗に迎えられる重臣となりました。学問德行ともにすぐれ、王羲之の書を熱心に蒐集していた太宗の第一の顧問でした。書は智永に学んだと言われ、王羲之の正統を受け継ぎ、精妙かつ品格の高さは唐代のみならず、歴史に残る楷書古典のなかでも抜きんできています。

孔子廟堂碑は、学問文芸の象徴として各地に立てられた孔子廟の一つで、太宗の命により長安に再建されたものです。その内容は表面的には孔子の聖徳を讃えて学校教育の重要性をうたったものですが、後半の大部分は太宗を称賛するものです。

今月の五文字は太宗が皇太子になった当時の虞世南の官位です。

平陳つら安

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(57)

其の要を陳ぶること罕なり

象雲臨

『平陳其要』

前回は、同じく書を書いても時と場合によって良い時と悪い時があり、これを「合」と「乖」という概念で、それぞれ五つの要素や場面について孫過庭が述べていることを解説しました。

今月の一節は、書の奥義を悟った人は、いわゆる「意を得て言を忘る」であって、その要訣を他の者に語ることをしない、という文言です。これに続く文章を要約すると、「名跡を学ぼうとするものは、その先人の高風を慕って作品の妙趣をあれこれ説明はするが、結局は技術的なことを述べるだけになって、本質に説き及んではない。」と孫過庭は言います。

全くその通りで、古典作品解説は技術的なことに偏り易く、その書かれた精神の本質まで及ぶことは難しく、逆に言う古典のもつ本質的な要訣は、個々が感覚的に掴むものでしょう。偏見を捨てて古典と向き合うことが大切です。

平陳つら安